



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

わたしも神のいつくしみを届ける人になろう

「神のいつくしみの主日」を迎えました。一年前の「神のいつくしみの主日」が前任地での最後の日曜日でした。残りわずかとなった日々を惜しみながら説教台に立ったのを思い出します。今年は、去年とは違った学びを見つけました。

さて今年の初めあたりから、百周年記念誌のタイトル募集をしておりまして。少しずつ応募が集まっておりますが、特に黙想会のおかげで、わたしが声をかけたこともあって、たくさんの方が応募してくださり、最終的に 51 通の応募がありました。

27 人、51 通の応募をすべて開きまして、なかなか一つに決めるのが難しく、最終的に「タイトルとサブタイトル」という形をとり、2 人の方の応募を組み合わせる今回の記念誌のタイトルとすることといたしました。メインのタイトルは「百年の祈り未来へ」を短くして主任司祭が一文字加え、「祈りは未来へ」とさせていただき、サブタイトルは「瀬戸山天主堂 100 年の歩み」を使わせてもらいました。

最終的に、記念誌のタイトルは、「祈りは未来へ～瀬戸山天主堂 100 年の歩み～」とさせていただきたいと思っております。応募されたほかのタイトルも印象深いものばかりでした。この場をお借りして感謝申し上げます。採用された 2 人にはあらためて記念品を差し上げますが、応募された全員にも、何かのしるしは差し上げようと思っています。

ちょっとだけ余談です。メインのタイトルからは「百年」を外させていただき、一文字だけ主任司祭の責任で付け加えたと言いました。「一文字加えたから、わたしも記念品もらえるかなあ」と言ったら、「ダメ」と言われました。一文字変えても応募した人の作品であることに変わりはないそうです。それはそうと、記念誌編集部会の皆が、良いタイトルができたと喜んでおられました。前回の記念誌「永遠の潮騒」にかかわった方々もきつと喜んでくださると思っております。

福音朗読に戻りましょう。今週の朗読箇所は、直前の箇所と読み比べると興味深いです。直前のヨハネ 20 章 1 節から 18 節は、週の初めの日の出来事で、前半では複数の弟子たちが登場し、後半ではマグダラのマリアに焦点が当てられています。

同じように、今週の朗読も週の初めの日の出来事で、前半は弟子たち全般が取り上げられ、後半はトマスに焦点が置かれています。何かを考えさせるために、福音記者がこのように整えたとも考えることもできるかもしれません。

そこで考えたのは、イエスの復活の出来事は、共同体にも、個人にも、救いの恵みを届けるということです。中でもトマスは、取り残された人の代表のように見えます。共同体に広く喜びが届いても、一人二人の、取り残された人がどうしても出てくる。そんな取り残された人にも、イエスの救いの手が届く。そのことを教えているのでしょ

福音朗読の学びは、わたしたちの信仰生活に何を教えてくれるでしょうか。朗読箇所は、わたしたちの信仰生活の何かに似ていないでしょうか。お気づきの人もいるかもしれませんが、週の初めの日に、共同体が集まっている場面は、わたしたちのこの主日の集まりのことではないでしょうか。

もちろんわたしたちは、「自分たちのいる家」である「教会」の戸に鍵をかけてはいないでしょう。しかし、人によっては、日曜日のこの時間に教会に行って集まっているのだと、公にしていない人もいるかもしれない。そこまでではなくても、教会に行って何をしているか聞かれた時、「いやちょっと」と口ごもる人もいるのではないのでしょうか。

そんな、いろんなものを背負って集まっているわたしたちの中に、イエスが来て真ん中に立ってくださいます。それはつまり、わたしたちがささげるミサ、聖体祭儀です。パンとぶどう酒のもとに、イエスさまが確かにおいでくださる。ここに集い、聖体祭儀を共に祝うわたしたちは、「平和があるように」といつくしみ深い声をかけられ、「聖霊を受けなさい」と使命を授けられ、派遣されていくのです。

しかし、中にはどうしても事情があってこの祭儀にあずかれなかった人がいるかもしれません。だれかから、「この前のミサに行っていないの？あーそれは残念」と、さらに追い打ちをかけられるかもしれません。いつの間にかわたしたちは、「ミサに行けなかった人」を、「ミサに行くことができた人」の立場で見ているかもしれないのです。

その時こそわたしたちは、「神のいつくしみ」を示すまたとない機会になります。その時のミサに参加できなかったことをあれこれ言うよりも、また主の日に集まって、いつくしみ深い神に近づこう。共同体にも、個人にもいつくしみ深い神が待っていてくださる。そんな声かけが必要なのだと思います。

今年の復活徹夜祭を思い出してください。光の祭儀の様子を、生まれて初めて見た人もいたのではないのでしょうか。声は聞こえるけれども、何をしているのかは分からない。わたしは特に関わっているメンバーではないから、見るができなくても仕方がない。そんな思いだったのでしょうか。

わたしは、「もっと多くの参列者が、光の祭儀、復活のローソクにおこなっている儀式を見せてあげたい」そう思ったので、知恵を絞りました。より多くの人に、参加していてもはじかれているその人に、司祭が執り行っていることを見せたい。何か工夫すれば、神のいつくしみがそこに感じられるのではないのでしょうか。

今日、復活したイエスさまは、わたしたちにトマスの姿を示して、何かの事情で漏れてしまった人に、あなたが恵みといつくしみを届ける人になってくださいと派遣します。どのように答えようかを考えてください。あなたが神のいつくしみを届けるために力を貸してくれるなら、イエスの復活を見ないのに信じる人はもっと増えていくのです。